

〈論文〉

近代文学の始まりに与えた明治初期「立身出世」^[1]主義の影響について
— 森鷗外『舞姫』を例に —

劉 金 拳

はじめに

文豪森鷗外とその文学は、日本文学史上において、非常に重要な地位を占めていて、その処女作「舞姫」(『国民之友』明23年1月)に関する研究は特に盛んである。従来の代表的なものとして、自我挫折論を筆頭に、「恋愛と功名と両立せざる人生の境遇」^[2]にある主人公の太田豊太郎は、「真正の愛情知らぬ男」^[3]で、「自由恋愛を追求するに当たり、越えてはならない障害たる」「情と礼との衝突」^[4]に出会って、最後に無残に放棄したゆえ、それは「愛情の懺悔録」^[5]である説や、「人間像の不均質を均質化」しようとした森鷗外が、「時代そのものの矛盾に根ざ」して創作したこの作品は、「時代のすぐれた象徴に達してい」^[6]て、「封建人が近代人となる精神変革史ともいふべき」^[7]説などが挙げられる。

当然なことに、「人情は首脳なり」によって開かれた気運の中で出来た『舞姫』は、主人公豊太郎の単なる恋愛生活を描写したものではけっしてない。西洋文化に目覚めた自我と、立身出世のコースに乗っ取らなければ生きてゆけない社会との間に板ばさみにされて苦しんだ彼は、あまりにも厳しい現実屈服して目覚めた自我を否応なく自ら抹殺した若者の一人に過ぎないと思われる。

東西の文化をともに身につけたというのは、近代に入ったばかりの当時のアジア諸国文化人において普遍的な現象であり、文学分野においても東西文化の融合は近代作家が目立った特徴である。本稿は、『舞姫』に対する分析を通じて、確立された天皇中心の中央集権的な統一国家のもとで、儒教、武士道などの伝統精神に根ざし、西洋の立身出世主義を吸収して出来た明治初期の立身出世思想に強く影響された青年達は、何よりも立身出世、よりの確に言えば出仕というコースを自ら奔走していく必然性という角度からこの社会的悲劇を分析し、近代文学の始まりに与えたその影響を伺おうとするものである。

1 明治初期の合言葉の立身出世主義

「立身」とは、元々「立身行道，揚名於後世，以顯父母，孝之終也」（『孝經』）（身ヲ立テ道ヲ行ヒ，名ヲ後世ニ揚テ以テ父母ヲ顯スハ，孝之終也）から来た儒学の用語で，武士の世界で提唱されたもので，「出世」とは，衆生を救うためにこの世に現れることや，世間的なものを越えているという意味の仏教の用語で，町人などの庶民の世界で通用されたものである。が，明治時代になって，恰も「士農工商」の平等化を象徴するように，別々だった両者は見事に統一され，四字用語として一般化し，社会地位の向上や富みの蓄積を意味し，時代の合言葉となったのである。

日本を立ち遅れた封建国家から西洋と比肩できる近代国家に改造するには，明治政府は，パラレルな課題として国際社会における「富国強兵」と国民内部における「立身出世」を追求するため，平等的身分のある近代的国民を育成するのは急務だという近代的社會教育觀のもとで，「官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス」という「五箇条の御誓文」（明治元年）や「学問ハ身ヲ立テルノ財本」という「学制被抑出書」（明5）を公布し，「身分相応」ではなく，「実力相応」の時代が到来したと煽り立てた結果，日本政府も民間の有識者もこぞって西洋文化の取り入れと西洋式教育の導入に励み，従来の身分・家柄にかかわらず，学問さえ取めれば，社会的に高い地位に着き名声が得られるというのは，立身出世の理念として民間人の一般的常識となったのである。

先ず，明治政府の方策を見よう。

近代的国民は，平等的身分を有する民でなければならない。そのため，明治政府は，西洋の政治制度の導入，廃藩置県の実施，四民平等，職業選択の自由など封建制度を一掃しようとする改革を次々に実行した上，文明開化のために，男女等しく学ばせる国民教育の建設を目指して，江戸末期以来の実学重視を受継ぎ，文部省の設立（明4）と西洋に倣った学制の公布（明5）などをした。特に実学による出世という西洋の向上主義觀を教育に盛り込んだことは，若者達に大きな影響を与えた。例えば，明治17年文部省唱歌として発表され，明治～昭和期学校の卒業式で広く歌われ，「身をたて名をあげやよはげめよ」を訴えたことで親しまれた『仰げば尊し』を筆頭に，『尋常小学読本』などの教科書にも立身を奨励する内容をたくさん盛り入れてある。行政をバックアップにした教育は，社会思潮と日本人の思想に大きな影響を与えた。

次に民間有識者の推進である。

明治青年の精神形成にもっとも大きな影響を与えた著作は，中村正直訳『西国立志編』（明4）と福沢諭吉著『学問のすゝめ』（明5・2～明9・11）である。西洋の偉人，ヒーローの伝記を借りて，成功に必要な勤勉，克己，豪毅，節約などを美德として詳しく紹介した

『西国立志編』に対して、名句「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」で始まった『学問のすゝめ』は、身分制度を打破するための人間平等の宣言であると同時に、恰も誰もが勤勉によって立身出世できる競争社会の到来を確認したかのようなものである。これは近代日本人に強烈な立身出世の夢を持たせたことに大いに寄与した。

このように、官の主導と民の推進によって、立身出世は、正に時代の合言葉となり、多くの若者を激励した。小学生の投稿誌『穎才新誌』一つを例にとって見るだけでも分かるように、明治10年度、この雑誌への投書は、直接「勤勉・勉強」を訴えるものが圧倒的で、「外の主題の投書にも勤勉刻苦を良しとする禁欲主義や立身出世の欲求が投影されているものが少なくない」⁸⁸。教育の世界で推奨され、世の中で賑わわれた影響で、人生の軌出に当たって、日本の若者達には、門地や出自に関わりなく、己れの才能と努力次第で出世できるという夢を抱かせ、立身出世の道を歩もうという心構えができたと言えよう。この意味で立身出世主義に基づく人材育成により日本は近代化を実現したと言っても過言ではなからう。

しかし、次に分析した原因によって、明治初期の日本青年は、江戸時代の「立身」「出世」や西洋の実学による向上主義とは違って、個人の自立より世間体を重んじ、出仕こそ最高だという明治初期の「立身出世」観を持っていた。それは、当時の青年に、せっかく目覚めた自我を挫折させた最大の壁だと思える。

2 明治初期「立身出世」主義を形成させた日本の風土

伝統文化と西洋の実学をもとにした「立身出世」主義の影響が思想的基礎で、天皇中心の集権的中央政権の確立によって整えられた条件のもとで、出仕に固定した明治初期の「立身出世」主義はできた。

先ず儒学の直接的影響である。

儒学の「明明徳」「親民」「止於至善」の三綱領と「格物」「致知」「誠意」「正心」「修身」「齐家」「治国」「平天下」の八条目は、江戸時代の武家層に受け入れられ定着した。が、中国に源を持ち、しかも同じく儒教の原典から出発したにも関わらず、異なった学び取り方をしたため、日本には「仁を中心徳目とみなす中国儒教」とまったく異なった「君主に身を捧げるという意味の忠を中心徳目とした日本儒教」・「国家主義的儒教」⁸⁹ができた。これは、後に尊皇攘夷思想に結びつき、明治維新への原動力の一つとなった。

更に、徳川時代に武士の間に広がった道徳としての色合いが強かった儒学は、明治政府の推進した義務教育、とりわけ日本儒学に基づいて頒布した「教育勅語」（明23）によって広められ、日本国民のイデオロギーになった。短いながらも天皇が国民に直接語りかけ

る形で忠君愛国を説き、国民の忠孝心が「国体の精華」「教育の淵源」で、事あらば国の為に尽くすなど12の徳目（道徳）を強調したこの「勅語」は、ずっと昭和23年国会で失効確認と決議されるまで、国民道徳の規範として作用していた。

それから、注目しなければならないのは、「天下之本在国、国之本在家、家之本在身」（天下の本は国に在り、国の本は家に在り、家の本は身に在る）（『孟子・离娄上』）という儒学思想による転倒には、孝行の最高形態としての「立身」は欠かせない働きを果たし、よって自らの才能を国家に奉仕するという思想が、日本人の心に根ざすようになったことである。詳しく言えば、儒学に影響された若者達は、「失敗は個人の問題である以上に『家』の問題であり、それは世間的には恥辱として意識されるのである。逆にこの恥の意識こそ立身出世主義の心理的発条としてかれらを絶えず鼓舞しつづけたものなのだ。」¹¹⁰⁾とあるように、身分制度によって富みを蓄積したが政治への熱望が遮断された江戸時代の商人とは違い、明治初期に入り、没落した士族の弟子は、そもそも自らの努力による個人の社会地位や生活の向上を、個人レベルに留まらず、社会的いやむしろそのまま国家レベルの富国強兵＝列強への仲間入りへと、つまり「家」の再興と国家への奉仕を一体化した。

次は武士道の底流をなした儒学による間接的な影響である。

新渡戸稲造『武士道』が詳しく分析したように、武士道は日本の伝統に根ざした武家の文化精神で、大和民族の魂と道徳の支柱として日本人の思考様式、行動様式に絶大な影響を与えた。とりわけ周知のように、徳川幕府が朱子学を官学として強化した結果、

武士道の形成の過程においては、いかなる宗教、哲学に比べ、他ならぬ儒学のほうが大変重要な役割を果たした。武士道は武士らが中国の儒学を吸収し、日本当時の歴史状況に基づき日本化された産物であると言えよう。¹¹¹⁾

と、武士階級は深く儒学的に教育された。明治時代に至っては、「徴兵告諭」（明5）によって、軍事は武士が家禄を受け取りながら特権的に携わるものではなく、国民の義務として担うものへと変わり、さらに「我国の軍隊は世世天皇の統率し給う所にぞある」に始まる『軍人勅諭』（明15年）の頒布により、「忠」を首位に推賞した結果、元々藩主に「忠」を尽くした武士を、国家・天皇のために忠を尽くし、国に報いる武士に転換させた。しかも、全日本人が潜在的な軍人であるという考えで頒布されたこの勅諭は、軍人精神の根幹として守られたばかりでなく、民間にも普及して国民精神の形成にも大きな影響を与えた。天皇制ファシズムの根本は、「忠君愛国」という四字に集約できる¹¹²⁾との指摘は、ここに一理も求められる。

もっとも重要なのは、一連の政治操作によって確立された近代天皇制である。

あくまでも政治改革に過ぎない明治維新だけに、天皇制によって象徴されたように、日本の国体は封建的影響から脱出できないばかりか、近代国民国家を確立するため、ドイツに習い、一連の政治的操作、例えば神道の国教化（明3）、大日本帝国憲法（明22）や先にも触れた「教育勅語」などの頒布により、天皇が絶対化され、できた「近代天皇制は、ロシアのツァーリズムとプロシアのカイザーツウムと対比される絶対専制的・軍事的・警察的な性格を持っている」¹¹³。こんな状況のもとで、天皇は「君」に、国民は「臣」に変身された。この中央集権的制度の確立によって、出身を問わず有能な人材を抜擢する社会的条件が整えられた。

周知のように、中央集権的な制度を実施した中国では、隋から清の末期までの間、「科挙」（598～1905年）という官僚登用試験が行われていて、「学而優則仕」（学びて優ればすなわち仕う）というのは、知識人の立身コースである。しかし、遣隋使や遣唐使を派遣して中国の制度や文化を取り入れた古代日本は、国家というものの仕組みが、ほぼすべてを中国（隋、唐）から学んだといっても過言ではないが、中国の「科挙」こそそのまま導入しなかった。詳しく言えば、平安時代に一時導入したが、一方受験者の大半は下級貴族で、合格者は中級貴族に進める程度であったし、同時に高位貴族の子弟に自動的に官位を与える「蔭位の制」も設けていて、当時の貴族政治を突き崩すまでには至らなかった。しかもそれは律令制の崩壊とともに廃れ、院政期（11世紀後半～12世紀末）から官職の世襲制が進み、日本の歴史に及ぼした影響は少なかった。とりわけ、その後の長く続いた「幕藩制国家は、専制的な公的権能を有する将軍を君主とし、宗教的・身分的な諸観念を国家的序列のうちに総括する封建的な『権威』としての天皇を置く封建的王国の形態をとる封建国家である」¹¹⁴って、その幕藩体制下の藩という「幾百の小国」が割拠し、「小国をして互いに藩屏閥所を据えて、相猜疑し、相敵視せしめれば、日本人民の脳中、藩の思想は鉄石の如くに堅けれども、日本国民なる思想は微塵ほども存せず」¹¹⁵、当時の「国」とはまさに藩以外の何ものでもなかったゆえ、将軍という絶対権力は、中国の皇帝の絶対権力より弱くて、科挙を実施する社会的条件が整わなかったのである。

それに対して、明治維新後、一連の政治的操作により、「三百の列藩は兄弟なり、幾百千万の人民は一国民なるを発見し、日本国家なる思想此に油然として湧き出でたり（中略）国家と天皇とは初めて連絡を生じ、国難に殉ずるは、即ち天皇に勤むるものにして、天皇を尊とぶは即ち国家に勤むる所以になりとなし」¹¹⁶ 思想が制覇し、「学得文武芸、貨於帝王家」（学問と武芸を磨いて、帝王に奉ずる）時代は到来した。つまり「科挙」に準ずる官僚登用制度が実施できる社会的条件が整えられた上、必要になったのである。したがって、

政府は、1894年に科挙を参考にして「内閣制度」(明18)とそれに伴う「文官試験試補及見習規則」(明20)を公布し、高等文官試験制度を完成した。

よく指摘されたように、「明治初期の官吏任用制度は、おもに獵官対策を目的に設計されたこと、そして文部省管轄下の帝国大学における官僚養成が企画された」^[17]ことが特徴で、「特定の学校の卒業者、いかえれば『学歴』としての『卒業証書』の所有者だけに、『試験免除』ないし無試験任用の特権を与える」^[18]ことが実現され、それによって「学校と職業の二つの試験制度を結びつけ、いわゆる『学歴主義』を成立させ」^[19]た。よって、明治政府は国家と民衆との間のコミュニケーションのパイプとしての官僚制を創出して、当時のエリート青年、とりわけ帝国大学の卒業者に、末は博士か大臣か、という夢を与えた。

「立身出世」は国民教育の目標であり、新しい道德そのものでさえあったこの時代に、「官あるを知て私あるを知ら」ざるものが多くなり、「只管政府に眼を着し、政府に非ざれば決して事をなすべからざるものと思ひ、これに依頼して宿昔青雲の志を遂げんと欲するのみ」で、結局、「方今世の洋学者流は概ね皆官途に就き」、「青年の書生僅に数巻の書を読めば乃ち官途に志し」、世の人は、「官を慕い官を頼み、官を恐れ官に諂」^[20]うという社会現実に陥って、「立身出世」の道は、「功名」言い換えれば「出仕」に限定されている。

3 「舞姫」から見る立身出世主義の影響

五歳で「論語」を、六歳で「孟子」を教わり、七歳で養老館に入学し、儒学の典籍を正式に勉強し始めた鴎外は、深い儒学の教養を有していた。「立身出世」の熱情に燃えていた彼は、森一家の期待を一身に負い、幼い頃より神童ぶりを発揮し、ドイツ留学を実現してから、小倉左遷も経験したにはしたが、日本軍医の最高官位である陸軍軍医総監に昇進し、晩年帝室博物館総長や帝国美術院初代院長を歴任した。一途な立身出世のコースから逸れたことはなく、ある意味では、儒学は彼の人生を決定し、文学思想と創作にも直接的・間接的に大きな影響を及ぼしたと言えよう。

「舞姫」は鴎外の「懺悔録」と呼ばれるほど、内容的には作家本人の生活の投影は色濃い。ここで小説から明治青年の思想にもたらした旧思想の影響を見ていこうと思う。

3.1 立身出世に燃えた豊太郎

余は幼きころより厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出で、予備費に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、

一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遙々と家を離れてベルリンの都に来ぬ。

とあるように、「旧藩の学館」で啓蒙教育を受けて、儒学に深く影響された豊太郎は、立身出世主義が社会を制覇した時期に、実学を身につけた。ずっと「功名の念」に駆動され、国のために力・忠誠を尽くし、母親のために孝を尽くそうという志を立てた彼は、懸命に努力し、「一級の首にしるされたりし」、順風満帆でとんとん拍子の出仕を果たし、母親の「活きたる辞書」と官長の「活きたる法律」となった。ただここで理解しなければならないのは、彼本人に自覚されたか否かは別にして、彼をして倦むことなく一途に頑張らせてきた動力は幼少時に受けた儒学の影響である。そこで、洋行せよとの命令を受けた時、「我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心」になり、「勇み立ちて、五十をこえし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず」だったのである。『穎才新誌』の明治十年度から明治二十年度まで約十年間の投書の中、「遊学スル友ヲ送ル記」は七十四編もあり、一番多かった^[21] こともその影響の強さを裏付けている。もちろん、儒家思想の影響を深く受けた豊太郎にとっては、「我家」は個人の家業であると同時に、明らかに国の大事業に関わるものであった。

3.2 ドイツ留学の使命感

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とをもちて、たちまちこのヨオロッパの新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは（中略）始めてこゝに来しものの応接にいとまなきも宜なり。されど我胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

「応接にいとまな」いほどの魅力的なベルリンを目の前にしていながらも、豊太郎は「我胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじ」と誓い、懸命に「我を襲ふ外物を遮り留め」て、「官事の暇ある」時に、ほかの留学生と「ともにビール杯をも挙げず、球突きの棒をも取らず」、「大学に入りて政治学を修めむ」ことにした。しかし、皮肉なことには、エリート育成を目指した日本の帝国大学と違って、ヨーロッパの大

学には「政治家になるべき特科」はないせいで、やむを得ず彼は「心迷ひながらも、二三の法家の講筵に列ることにおもひ定め」た。

「あだなる美観に心をば動さじの誓」をさせた原因は、「模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とをもちて」と、豊太郎は認識していたが、出仕目的の立身出世主義に影響され、国の期待に応え、ベストを尽くして任務を全うし、「東洋の帝国にヨーロッパの学問を持ち帰る使命感」¹²¹こそ根本的な原因である。と同時に、出仕できるための自我保護として、「つねに我を襲ふ外物を遮り留め」、「わが心はかの合歡といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんと」したわけである。

3.3 徐々に目覚めた自我

勤勉一途で官職につくこと、忠実・孝行を尽くすこと、出世すること、祖先の名を上げること、いや封建思想によって僻まれた立身出世＝出仕思想がもたらした若者の思想への圧迫の残酷さなどに対して少しも疑わずにいて、ずっと「自らわが手足を縛せしのみ」、「ただ所動的、機械的の人物」だった豊太郎は、「長者の教を守りて、学の道をたどり」、「仕の道を」「ただ一条にたどりしのみ」だったが、一旦日本を離れ、「ヨオロッパの新大都」に渡航し、とりわけドイツの大学に入って、日本では体験できなかった個人尊重という近代思想を初めて体験するようになった。当時、人文主義を提唱したルネッサンス（14～16世紀）の洗礼を受けたドイツは、18世紀頃、ヴォルテール、ルソー、ディドロ、さらにレッシング、ヘルダーらドイツ啓蒙思想家の影響で、人間の主体性・理性を尊重し、人間自身に対する認識をさらに深化させた結果、自我意識が急速に発展してきて、「民間学の流布したることは、歐洲諸国の間にてドイツに若くはなからん」と、言論も学術的雰囲気も人々の思想ももっとも自由な国であった。近代哲学者・思想家の「ショオペンハウエルを右にし、シルレルを左に」して、「終日兀坐」して「読書」した豊太郎は、人間性を肯定・尊敬する近代思想に共鳴し、「時来れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ」とあるように、今時自我が抑えられなくなり、自ら自由生活を憧れ、人間らしい人間になりたがっていた。したがって、彼は、「官長に寄する書にはしきりに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じ」たり、「立身出世」の本筋に背いた「歴史文学に心を寄せ」、しかも「やうやく蔗をかむ境に入」った。エリスへの恋は、ある意味から言えば、この反抗行為の一つと言えよう。

3.4 立身出世思想からの一時離れ

儒学では、結婚は、「人材を知りてのこひ」、つまり家柄を重んじ両親の意志により決め

られるものだと強調されているのに対して、近代のヨーロッパでは、自由恋愛を追求することは自由精神の極致であると推奨されている。そこで、帝国日本のエリートである豊太郎は、身分が低くて、しかも貧困のどん底にいた舞姫のエリスと恋に落ち、更に一緒に暮らすということは、明らかに幼い頃から受けた「厳しき庭の訓」や「旧藩の学館」で身につけた儒学の宗旨への反発であり、「家」更に広く言えば「国」の束縛の打破に踏み切った行為で、当時の日本には絶対に受け入れられないものであった。したがって、官長は「我官を免じ、我職を解い」て、公使は「御身若し即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、もしなほここに在らんには、公の助をば仰ぐべからず」と訓戒を施したのである。官長の目的は圧力で豊太郎に屈服させ、無理やりに明治政府側＝出仕の道に回帰させるほかはなかったに違いない。

「公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。このままにて郷にかへらば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ」と豊太郎は迷いに迷った。選択に迫られた時、彼が真っ先に思いついたのは、やはり学業、名誉、出仕であった。これで帰国すれば、地位が損なわれ、名誉も傷つけられる。しかし、ドイツ滞在を続ければ、転機があるかもしれないというも、彼にドイツに滞在させる原因の一つではなかったろうか。これは時機を判断した上での便宜的措置だったと言えよう。

良友相沢謙吉のおかげで、新聞社の通信員になった豊太郎は、エリスの家に寄寓し、「政治社会などに出でんの望みは絶ちし」、「有るか無きかの収入を合せて、憂きがなかに」生活をしていながらも、目覚めた自我と自由な意志で生活できることを一時幸いにして、

昔しの法令条目の枯葉を紙上に搔寄せしとは殊にて、今は活潑たる政界の運動、文学美術に係る新現象の批評など、かれこれと結びあはせて、力の及ばん限りビヨルネよりは寧ろハイネを学んで思を構へ、様々の文を作りし（中略）さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書をひもとき、旧業をたづぬることも難く（略）。

と、「楽しき月日を送」っていた。ここの「旧業」とは、法律の勉強と立身出世の道を辿ることであるに決まっている。かつてこれを目標にせずと順風満帆的に歩んできた豊太郎が、今時になり、かつて心を注いだ法令条目が無味乾燥なものと感じられるようになった。表面上法令条目を否定するよう見えるが、実は専念して追求してきた「立身出世」主義に対する否定で、豊太郎の目覚めは更に一歩進んだと読み取れる。と同時に、彼は通信員の仕事を通し、「幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるもの多き」と

感じて、「小をんなが持て来る一盃のカップフェエの冷むるをも顧み」る暇なく、政界の運動、文学美術の新現象に関する批評などに専心し、貪欲的に西洋の民主政治の思想及び文学美術などの人文学科における新思潮の吸収に励み、「冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ」、自分の視野を広め、見識を長じさせ、西欧の近代化・日本と西欧との差などが次第に明瞭に理解できてき、「自ら総括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到」った。これはドイツに到着したばかりの頃、ドイツ近代思想を恐れて排斥する彼と比べれば、まるで雲泥の差である。

3.5 立身出世離れに動揺し、復帰した豊太郎

ずっと社会のエリートとして活躍してきた豊太郎は、エリスとの恋に落ち、歴史文学に心を寄せ、思うままに新聞社説を書いたり、自由に自分の考えを発表したりすることを通じて、一時的に愉快、洒脱の感を覚えた。が、一時的な離れは、決して「立身出世」の道との決別ではなく、むしろあくまでも一時的な逃避に過ぎなかった。この点に関する描写は多くないが、シンボリックなのは、次のことである。現実の残酷さを認識した後、彼はうつうつとして楽しまなくなり、とりわけエリスの妊娠を知った後、「ああ、さらぬだに覚束なきは我身の行末なるに、もし真なりせばいかにせまし」と、人生の目標も見えなくなり、帰属感の喪失に従い、心も空虚になり、最後に残ったのは困惑、恐怖感だけであった。こんなところへ持ってきて、生活の水準も急激に低落するにつれ、「壁の石を徹し、衣の綿を穿つ北ヨオロッパの寒さ」のような「なかなか堪えがた」い落ちぶれた生活に恐慌感を抱き、「大洋に舵を失ひしふな人」になり、契機があり次第に「立身出世」の道に復帰するのは、当然過ぎた成り行きであった。

こんな中にいる豊太郎を「救い上げた」のは、相変わらずよき友の相沢兼吉である。彼は、「学識あり、才能ある」豊太郎が、家柄、身分がつり合わないエリスと一緒に暮らすのは、「人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交なり」として否定し、再び官途を歩ませようとすることを期待し、「目的なき生活」をしていて「覚束なきは我身の行末」を案じていた彼を来独した天方伯に推薦して、正に「渡りに船」というふうに、動揺していた豊太郎に復帰のチャンスを提供した。

久しく踏み慣れぬ大理石の階を登り、(中略)二重のガラス窓を緊しく鎖して、大いなる陶炉に火を焚きたる「ホテル」の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、(中略)余は心の中に一種の寒さを覚えき。

と、「久しく踏み慣れぬ大理石の階」は官僚社会、上流社会の象徴である一方、官僚社会、上流社会の生活への豊太郎の未練をも物語っている。「二重のガラス窓」と「大いなる陶炉に火を焚きたる『ホテル』の食堂」によって象徴された暖かい上流社会の生活と、自分の着た「薄き外套」によって象徴された「寒い」生活とはあまりにも大きな対比をなしていて、豊太郎の心を耐えずに刺激した。「大洋に舵を失ひしふな人が、遥なる山を望む」ように、血液に浸透しきったゆえ、一時静まり返った功名心は、今こそ時機だというふうには蘇り始め、彼に出仕への熱望を再び燃やさせるようになった。「翻訳は一夜になし果てつ」ことや、「余は明旦、ロシアに向ひて出発すべし。随ひて来べきかと」という天方伯の問に対して、「いち早く決断し」て「いかで命に従はざらむ」という答えから、豊太郎の復帰意欲がいかに切迫的なものであったかが読み取れる。このように頑張った豊太郎は、天方伯に好感を持たせたのである。

ロシア出張中、「幾星の勲章、幾枝のエポレットが映射する光」を浴びながら、「フランス語を最も円滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余」であったゆえ、「わが舌人たる任務はたちまちに余を拉し去りて、青雲の上に墮し」て、失った自信が益々戻り、国のために必ず何かができるという野心が蘇ってきた。

そんな心境にいた豊太郎は、相沢に薦められ、「大臣の信用は屋上の禽のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるる」ようになり、この千載一遇の契機を利用して再び出仕コースに戻り、国家のために力を尽くすことを選ぶべきか、愛情を選ぶべきかというジレンマに陥ったのである。前者は、幼い頃より馴染んできた「立身出世」思想に従って帰国して、時代の流れに乗り、再び官途を歩み、「揚名於後世、以顯父母」の夢を実現するだけでなく、帰属感と安全感を再び得られることであった。それに対し、後者は、目覚めた自我にとって、人間個性の解放であり、自由、愛情への強い渴望で満たされるが、将来の見通しが立たないし、望めど尽きない未知の道路であった。

ああ、ドイツに來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また機械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。さきにこれを操つりしは、我某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。

とあるように、この東西思想文化の対決において、目覚めた自我は、出仕による「立身出世」主義に負かされてしまった。

3.6 悲劇から伺える出仕影響の強さ

前にも見たように、豊太郎の自我は目覚めなかったのでもないし、「余がエリスを愛する情は、始めて相見し時よりあさくはあらぬ」と、彼とエリスとの間に真の愛情がなかったのでもない。そこで、「ああ、何等の特操なき心」、「我脳中には唯唯我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心の満ち満ちたりき」と、いかにエリスに直面・告白するかに迷い悩んだわけである。豊太郎が、家に帰ったとたんに地に倒れ、「人事を知るほどになりしは数週の後」になったことは、彼の心がどれほど痛まれたかを物語っている。しかし、この時に至っては、実は心の中では「故郷を憶ふ念と栄達を求むる心」は、既に「愛情を壓せんとせし」のである。そこで、大臣に「われとともに、東にかへる心なきか」と聞かれた時、彼は、「もしこの手にしも縋らずば、本国をも失ひ、名誉を挽きかへさん道をも絶ち、身はこの広漠たる歐洲大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭を衝いて起」ったのである。

ここで真剣に考えなければならないのは、昔「ただ所動的、機械的の人物」だった人間とは違い、ヨーロッパの自由思想の洗礼を受けた豊太郎は、今度、積極的に立身出世の道に帰り、出仕を選んだことである。ここに至っては、彼は初めて自分の運命の主宰者となったと言えよう。日本という新興国家の期待を背負ってドイツに留学したエリートの豊太郎は、真の愛情や目覚めた自我を抱いたことがあるにはあったが、今になって、一時静まったように見えたが、完全に沸きあがった「立身出世」思想に負かされた。ヨーロッパの大会の人の海に埋葬されたくない——帰国——名誉の挽回という一念は、彼をして、男女間の真の愛情さえ抑えつけて、ついに「承はり侍り」と答えさせ、生ける屍のエリスを抱いて、ただ千行の涙を流しただけで、最後に愛情と功名の両者から、功名即ち帰国・出仕を積極的に選んだのである。明治初期の立身出世主義は、エリートの若者達の心に、国家のために出仕し、力を尽くすという夢を、どれほどの深さで刻印したのかが伺える。

終わりに

武士社会の「立身」思想、町人社会の「出世」思想、そして西洋の実学による向上志向は、一連の政治創作によって確立された中央集権的天皇制のもとで統合して、高等文官試験制度の成立が象徴したように、日本の青年のエリート達の出仕による明治初期の「立身出世」思想に発展してきた。その思想は当時の若者や知識人の思考・行動様式などに大きな影響を及ぼし、時代に鮮明な刻印を施した。こんな時代にいた太田豊太郎は、留学中、西洋の自由主義、個人至上主義をあがめ尊んだことがあるにはあるが、国家至上主義の思想に左右されていて、とうとう功名の誘惑に耐えられなくなり、しぶしぶながら真の自我を割愛し、国家の意志に服従し出仕することを選んだ。いや、選んだというより、選ばざ

るを得なかった。これは、表面上ただ恋愛の悲劇に過ぎないようだが、実は一時代の社会的悲劇であった。

* 本論文は、広東省「211 グローバル化背景下外国語言語・文学研究」プロジェクトのサブプロジェクト「中日近代文学発生期についての比較研究」(GDUFS211-1-025) とそれを発展的に引き継ぐ中国広東省人文社会科学研究プロジェクト「中日『あはれ』の文学比較研究」(11ZGXM750010) の助成による研究成果の一部である。

注

- [1] 立身出世の個人的欲望は、明治十年代には、天下国家への献身という「公的」な動機によって媒介されたのに対して、二十年代になり、政治世界への立身出世主義は次第に「私的」へと転化し、個人事業の建立、個人修養の追求がなされるようになったとされている。詳しくは、前田愛「明治立身主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで——」、『露伴における立身出生主義『力作型』の人間像』（『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』筑摩書房 1889）、小川太郎『立身出世主義の教育』（黎明書房 昭32）参照。
- [2] 石橋忍月「舞姫」『石橋忍月評論集』（岩波書店 1988）p116
- [3] 謫天情仙「舞姫を読みて」『文学評論 しがらみ草紙』四（新声社 1890.1）
- [4] 劉鶴岩「『舞姫』と唐の時代の伝奇愛情悲劇作品」『錦州師院学報』（1993.4）p75
- [5] 王長新『日本文学史』（吉林大学出版社 1990）p231
- [6] 笹淵友一「森鷗外『舞姫』論」『明治大正文学の分析』（明治書院 昭45）p119
- [7] 佐藤春夫「近代日本文学の展望」『佐藤春夫全集』第十二巻（講談社 昭45）p123
- [8] 前田愛「明治立身出世主義の系譜——『西国立志編』から『帰省』まで——」『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』（筑摩書房 1989年）p97
- [9] 森嶋通夫『森嶋通夫著作集 13 なぜ日本は成功したか』（岩波書店 2004）p27, 31
- [10] [8]に同じ p99
- [11] 金翰鈞「論日本武士道の源流及其演变」『时代文学』（2008.02）p120
- [12] 王家驊『日中儒学の比較』（六興出版 1988）p323
- [13] 松尾章一『近代天皇制国家と民衆・アジア』上（法政大学出版局 1997）p199
- [14] 深谷克己『近世の国家・社会と天皇』（校倉書房 1991）p80
- [15] 竹越与三郎著 西田毅校注『新日本史』上（岩波文庫 2005）pp31 - 32
- [16] [15]に同じ p32, 33
- [17] 菊池信太郎「『桐蔭文庫』に見る明治初期の高等教育と管理任用」東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室『研究室紀要』第33号（2007.6）p101
- [18] 天野郁夫『増補』試験の社会史』（平凡社 2007年）p219
- [19] [18]に同じ p207
- [20] 福沢諭吉『学問のすゝめ四編』（慶応義塾 昭34）pp51 - 52
- [21] [8]に同じ p97
- [22] 前田愛「近代文学と活字的世界」『日本文学新史——近代』（至文堂 1986）p24